

2020 年度文学部英米文学専攻ガイダンス

「作者氾濫の時代」の道しるべ

A Guide to the Students of the Department of English in the Age of Authors

原田範行

(慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授、イギリス文学)

何かと落ち着かない新年度を迎えましたが、英米文学専攻のみなさんには、こういう時だからこそ、いつにもまして勉学の機会を突り豊かなものにしていただきたいと思います。

さて、素晴らしいガイダンスを受けたスコラリオ君とステュピドー君、キャンパスはまだ閉まっているので、下宿の部屋で PC を開け、初回の授業を聞いてみることにしました。「近現代英文学—『作者氾濫の時代』の道しるべ」とあります。

「私たちは未曾有の時代に生きている、という言葉をよく耳にしますね。考えもしなかった、想像もしなかった、と。たしかにそうかも知れません。ここ 10 年、20 年、あるいは 50 年、新型コロナウイルスの感染拡大のようなことを、国や社会の設計段階で考えたり、想像したりすることはなかった。日本だけではない、世界の多くの国々がそうでした。でも、似たような状況がなかったわけではありませんね。第一次世界大戦中に起きた、いわゆるスペイン風邪もその一つ。当時、多くの国々が戦争遂行のため情報操作をしたのですが、皮肉にも、スペインは中立国だったために正しい情報が世界に広まり、その結果、こういう名前になってしまいました。世界中で 5 億人もの人々が感染したと言われています。」

「イギリスでもペストの流行はたびたびありました。特に 1665 年の大流行はひどかった。人口の約 1 割が亡くなったと言われています。当時の様子は、Samuel Pepys の有名な『日記』や『ロビンソン・クルーソー』の作者 Daniel Defoe の『ペストの記憶』などに詳しく記されています。それまで、考えもしなかった、想像もしなかったような流行が起き、それがあつる程度終息すると、人間はどうしても、新しい社会のあり方を考えることになる。ルネサンスや近現代社会が今のような形になってきた背景には、実はこういう疫病と人間とのかかわりがありました。それを知ったからといって、今の状況がすぐどうにかなるといわけではありませんが、人とモノが国境を越えて往来するグローバル社会のあり方とか、そういう中で繁栄する経済や産業のあり方とかについて、今を生きるひとりひとりがこれから考えていく必要はありますね。」

「先ほど、誰も考えもしなかった、想像もしなかった、と言いましたが、でも、本当にそうでしょうか。Pepys の『日記』も Defoe の『ペスト』も、それから、フランスのカミュの『ペスト』も、いずれも優れた邦訳がわりと最近出版されています。誰も考えもしなかった、想像もしなかった、というのは実は正しくなくて、より正確に言えば、今日のような感染拡大という事態を

ある程度想定していた人もいたし、情報もあったけれど、それが、もろもろの理由で一般的にはならなかった、ということではないでしょうか。」

「どのような情報に注目するか、これは現代において、たいへん難しい課題だと思います。今、みなさんがご覧になっている PC を使えば、ネット上の情報は瞬時にして手に入る。著者や編集者が丁寧に仕上げた評論であれ、個人をつぶやきめいたコメントであれ、歴史的検証を経たものであれ、そうでない不確実なものであれ、そういうものが対等に並んでいます。学問の世界もそうで、勉強していない人に限ってつまらない論文を引用する！ [ココデ、ネムリカケテイタ ステュピドークンガ メヲサマス] ネット社会が瞬く間に普及する直前の二〇世紀末あたりでは、おそらく誰も、こうした状況について考えもしなかったし、想像もしなかった、あるいは理想ばかりを見ていた、と言ってよいかも知れません。でもこれについても、実は似たような状況はありました。例えば、*OED* につながる本格的な『英語辞典』を編纂した 18 世紀イギリスの文豪 Samuel Johnson は、当時、印刷出版文化が進み、世の人々がみな作者になってしまった、現代は「作者氾濫の時代」と呼ぶにふさわしい、と言っています。印刷出版文化の隆盛とネット社会とでは、少し状況が違うとは思いますが、ジョンソンのぼやきから私たちが汲み取るべきものはあるでしょう。作者氾濫というか、情報氾濫の時代にあって、思索と想像力を駆使し、しかるべき情報を選び出してそれを社会に示す、できればそれを新しい創造に生かす、そういうことを、慶應の英米文学専攻での学びを通して実現していただければと思っています。」

ステュピドー君、ここでスコラリオ君に電話して、「今の、じょんそん、とかいう人の作品はなんていうの」と訊く。

スコラリオ君「*The Adventurer* という雑誌の 115 号だって。1753 年出版のものらしいよ。次は井上先生の英語学だね。」